ものづくりの現場から ⑦⑦

町工場を歩く

東京都大田区蒲田 (上)

東京都大田区蒲田。昔ながらの町工場が連なるこの地区は製造業を根底から支えてきた工場集積地域だ。最近では五輪出場を目指す「下町ボブスレー」プロジェクトで、メディアをにぎわす。また、羽田空港の国際化に伴い、日本の新たな玄関口としても脚光を浴びている。そんな新旧入り混じるこの地域に、自動車産業の一つの側面があった。

油圧シリンダー専業メーカーの南武では女性社員も活躍する

世界市場でも勝負できる 自動車産業支える技術集積

タイ工業団地に工場を借り受け進出

油圧シリンダーの南武

大田区の町工場が果敢に挑む姿勢は国内での事業だけにとどまらない。海外へと活躍の場を切り拓く企業もある。油圧シリンダー専業メーカーの南武は、主力である自動車エンジンブロック製造に使われる油圧シリンダーで国内シェア約7割を握る。トヨタ自動車や日産、ホンダなど多くの自動車メーカーと取引を広げる。

ただ、日本では「長期的に見ると人口減少による市場の縮小という問題がある」(野村伯英社長)。こうしたことから同社は2002年、新たな市場を求めてタイの工業団地に工場を借り受けて進出した。当初は「ノウハウもなく、苦しんだ」(同)という。製品の不良が頻発し、待遇改善を求めて退社する従業員が続出。熟練工が育たず、さらに不良率が上がる悪循環に陥った。そこで労働環境、待遇を少しずつ改善し、従業員の定着を図った。現在では、東南アジアやインドへの製品供給拠点として自社工場を運営するまでに生産を拡大した。さらには中国にも工場進出し、欧米にも代理店や営業拠点を持って確実に販路を広げている。タイでは政情不安、中国では尖閣問題が立ちはだかるが、「カントリーリスクを恐れていては何もできない。夢のパラダイスは存在しない」(同)と強気の姿勢を崩さない。

下町から海外へ直接進出の動き加速